

INTERNATIONAL ERIC NEWSLETTER

No.2

JULY 1990

エリック ニュースレター

国際理解教育・資料情報センター International Education Resource & Information Center

特集：アメリカの 国際理解教育

〈特集〉の目的は、多様な、しかも新しい国際理解教育の具体的手法を紹介することです。この多様性と新しさを優先するあまり、ニュースレターの編集方針の柱である「楽しく」「気軽に」「わかりやすく」の方をおろそかにしないように極力努力したいと思っています。

各教案は、原案に可能な限り忠実に翻訳する形でまず紹介し、その後に教案の内容と教案をおさめているテキストの解説を加えます。しかし、教案についての解説はあくまでも一通りの解説であって、異なる視点からの解説が他にもいろいろ可能であり、また日本の教育の現状を踏まえるといろいろと問題もあるかも知れません。

〈特集〉で紹介する事例が、そうした日本の教育が抱える問題も含めて乗り越えていくひとつの糸口になれば幸いです。皆さんのご意見・ご提案お待ちしています。

目次

〈特集〉 アメリカの国際理解教育	1
事例1：私たちのまちと世界	1
『転換期のアメリカ』：全米知事会の報告書	3
事例2：ナツツ入りのチョコシート	4
事例3：赤か、緑か	4
事例4：世界の労働者たち	6
事例5：世界はどんなふうに食べているか	8
ボストン子供博物館	9
事例6：引き寄せられやすい缶は魅力的！？	10
事例7：私、袋は要りません！	11
情報コーナー	12

事例1：

私たちのまちと世界

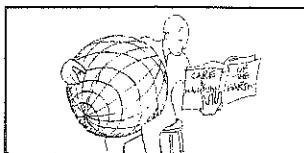
- ねらい：
• 私たちのまちと世界のつながりを認識する。
• 私たちの住んでいるまちで調査を行う。
• 世界地図を使って、私たちのまちと世界とのつながりを表わす。

準備するもの：プリント「私たちのまちと世界」と国境だけが書かれている世界地図（人数分）

展開：

調査は、放課後、個人ないし小グループでやらせる。点数制にして、調査結果が一番完全に近かった児童・生徒、もしくはグループに賞を与えてよい。

- 1 プリント「私たちのまちと世界」と世界地図を配り、手順を説明する。
• 設問に従って、5ヵ所でそれぞれ5つの国の例を探させる。(訪ねた店の名前等も明記するように)
• 見つけた国を世界地図で位置を確認して色をぬる。自分のまちとその国との間を直線で結ぶ。
- 2 世界地図や百科事典などを使って、生徒が「外国」を正しく理解しているかどうか、中近東やアフリカなどの世界の諸地域やパリやハワイといった都市や地方と国名を混同していないかどうか確かめる。
- 3 プリントが完成したら、結果について話し合い、集めたデータをもとに次のようなことを話し合う。
 - 1) 調査から、自分たちのまちは何ヶ国とつながりを持っていることがわかったか。(たとえば、つなが



プリント「私たちのまちと世界」

1 食料品店（各項目1点=最高5点）

近所の食料品店を訪ねてみよう。そこには、外国から来た物が、いろいろ売られている。バナナやコーヒーなど、多くの物はどこで生産されたのか見分けがつきにくいが、缶や瓶詰になっている物はラベルにはっきりと記されている。外国で生産された物を5つ探し出して、調査票を作ろう。

- ・調査すること：商品、商標名、国名
- ・調査をした店の名まえと住所

2 旅行代理店（各項目1点=最高5点）

旅行代理店は、世界中のいろいろな地域へのビジネス旅行や観光旅行を扱っている。壁やガラス窓に張ってある旅行ポスターやパンフレットなどを見ると、いろんな外国のまちや名所が宣伝広告されているのがわかる。世界地図などを使って、宣伝されている目的地を調べよう。

- ・調査すること：宣伝広告されている目的地と国名
- ・店名と住所

3 レコード店（各項目1点=最高5点）

音楽は国際的な言語だ。日本では外国の音楽がよく聞かれるが、外国でも日本の音楽は聞かれている。近所のレコード店へ行って、外国音楽を調べよう。

- ・調査すること：歌手及び演奏者、レコード名、国名
- ・店名と住所

4 銀 行（各項目1点=最高5点）

銀行は、いろいろな国際的な活動に関わっている。例えば、両替や国境を越えたお金の送金である。しかし、外国貨幣いくらが日本の円に相当するかを表わしている為替のレートは、毎日変化している。大きな銀行では、主な外国貨幣のその日の為替レートが表示されているが、もし近所の銀行でそれが分からぬ場合は、新聞を調べれば前日の為替レートが分かる。為替レートを調べよう。

- ・調査すること：通貨名、国名、為替レート
- ・銀行名と住所（あるいは新聞名）

5 デパート・百貨店（各項目1点=最高5点）

近所のデパート・百貨店へ出かけて、外国で製造された物を5つ探し出して、調査票を完成しよう。

- ・調査すること：商品、商標名、製造国名
- ・店名と住所

りのある国の名前をすべて黒板に書き出してみる。)

- 2) 自分たちのまちと最もつながりの深い国はどこか。
- 3) 次の分類のうちで、他の国の人々とのつながりを最も持っていると考えられるのはどれか。
 - ・売買される品物
 - ・趣味や様式（音楽、ファッション他）
 - ・知識と情報
- 4) この調査から、自分たちのまちについてどんなことがわかったか。
- 5) この調査の結果から、今日の世界についてどんなことがわかったか。

出典：NEW YORK AND THE WORLD, Global Perspectives in Education, Inc. New York, 1984

○教案の解説

対象：小学生（中～高学年）、中学生

教科：社会、特活など

時間：2～3時間

この教案は、地域社会に存在する世界とのつながりに気づかせることを目標としている。この手法はもともとオハイオ州立大学のチャドウィック・アルジャー教授によって考案され、地域に根ざした国際理解教育のもっとも効果的なアプローチとして知られている。（詳しくは、アルジャー著『地域からの国際化』、日本評論社、1987年を参照。）

それまでは、「国際関係」というと国境を越えたところで国際機関や政府や大企業が携わっていることで、一



一般的の市民にとって、テレビや新聞で見たり読んだりするもので、自分たちの生活とは掛け離れたものと捉えられがちであった。ところが、アルジャー教授の調査から、自分たちの身近な地域にも実に多様な世界とのつながりがあることが見えてきたのである。それは、地元中小企業の海外取り引き、教会などの宗教活動、自分の子供の通っているガール／ボーイスカウトや叔父さんの属しているロータリーの団体などを通してであったり、音楽、ファッション、映画などを媒体としたつながりであったり、あるいは八百屋さんや魚屋さんの店頭にならぶ品物を通したつながりであったり、近くの大学で勉強している留学生など人によるつながりであったりする。「だれもが、自分の生活拠点である地域で、世界とのつながりに囲まれて生活していくながら、そのつながりに気づいていないだけだ」ということが分かったのである。

ここで紹介したアプローチ「私たちの地域と世界」の教材は、問題・事象が具体的に見え、かつ身近かな材料によって、関連や結果がわかりやすいかたちでこうした世界とのつながりを取扱っているので、児童・生徒は主体的に参加し、題材に取り組みながら学習を進めることができる。

アルジャー教授の大発見に倣って、全米各地で「私たちの地域と世界」とのつながりを明らかにする国際関係論の教育プロジェクトが展開され、その成果物として、多数の「○○と世界」という教材が生まれた。その一つがここで紹介した『ニューヨークと世界』である。

○テキストの解説

このテキストを発行した Global Perspectives in Education は、米国のグローバル教育推進のリーダーとして、すでに20年あまり活動してきた民間団体である。

本教材は、ニューヨーク市の教育委員会と共同で1980年に行った「ニューヨークと世界」プロジェクトの中で開発された。ここで紹介したのは、本書の第1章で、わかりやすい例から世界とのつながりをまず紹介し、2章以降では、外国貿易、世界にまたがる生産活動、多国籍企業、産業廃棄物処理を通しての環境問題、国際金融などを段階的に扱いながらつながり探しを行う。幼稚園から高校までを対象にしているが、統計や企業・団体のリストなど、授業で使う詳細な資料はすべて教材の中に揃っているので使いやすい。

『転換期のアメリカ』——全米知事会の報告書

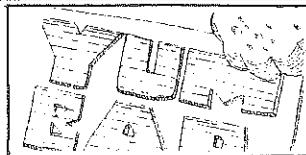
『転換期のアメリカ』と題する報告書が、1989年2月に全米知事会によってまとめられた。急変する国際情勢の中、アメリカもまた様々な対応を迫られている。従来、州政府の役割は州内のことに限定され、国際政治や経済などの国際関係は連邦政府に一切任せた形であった。しかし、急激な国際経済の変化で、もはや連邦政府だけに任せておくわけにはいかず、州政府独自に、国際貿易や国際社会との関係に直接臨んでいく時代が到来したと認識するようになったのである。そこで報告書では、国際的な政治、経済、文化を担っていくことのできる資質を備えた市民を育成するためには、国際理解教育を推進することが是非とも必要であると論じている。

米国では、国際理解教育への取り組みが、グローバル教育というかたちで始まってすでに20年以上になるが、中心になって進めてきたのは一部の民間団体や教師で、全国的に関心が寄せられるようになったのは、ここ2～3年のことである。報告書は、地域レベルの様々な試みとその成果を評価した上で、国際理解教育にすべての州が取り組むべきだとし、具体的な目標や対策を提案している。注目したいのは、州政府のイニシアティブによりながらも、教師、学校経営者、教育委員会、政治家、大学学長と教授、企業など多様なセクターを含む幅広い参加がこの取り組みの成功を決めると言調している点である。

報告書の具体的な提言をまとめると以下のようである。

- 1) 義務教育内への国際理解教育の位置づけ
- 2) 外国語教育の充実
- 3) 教師のための教育
- 4) 資料情報を収集提供するサービス
- 5) 大学、および学生の参加を積極的に推進
- 6) 企業と一般市民の協力を増強する体制づくり
- 7) 企業が国際理解教育を利用できる体制・企画づくり

このように、詳細な調査に基づき建設的な動機づけと方策が提示され、全州の知事に国際理解教育への意欲的な取り組みが呼びかけられたことは意義深い。

**事例 2 :****ナッツ入りのチョコレート**

ねらい：
・チョコレートさえも国際的な依存関係の産物であることを通して、自分たちが世界とのつながりの中に生きていることを認識する。
・その依存関係の一部にでも支障が起こると、全体に波及することを理解する。

準備するもの：生徒の関心をそそるために、実物のチョコレート。

展開：

1. 生徒を 7 つのグループに分ける。

チョコレート工場に経済的に大きく依存するある小さな町の住民をグループ 1 とする。

ナッツ入りのチョコレートに含まれているものを、生徒に考えさせる。チョコレート（カカオ）、砂糖、ナッツの他に、ココナッツ、コーンシロップが含まれている。それらの原料が、どこから来るか世界地図ないし地球儀を見せながら説明する。

チョコレートの原料であるカカオは、ガーナから来る（グループ 2）。

砂糖はフィリピンから来る（グループ 3）。

ナッツはブラジルから（グループ 4）。

ココナッツは太平洋の島々から（グループ 5）。

コーンシロップは米国から（グループ 6）。

これに加えて、最終的にチョコレートを包む紙についてはカナダから輸入される（グループ 7）。

2. 生徒にはとても身近なチョコレートでさえも、世界中でとれる様々なものを必要としていることを確認させた上で、次のような質問をしていく。特に、自分のグループがどのような影響を受けるか考えさせる。

- ・米国中部の日照りでとうもろこしが被害を受け、コーンシロップが手に入りにくくなった。
- ・このブランドのチョコレートをテレビで宣伝した結果、需要が急激に高まった。

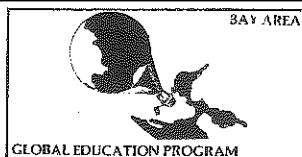
- ・台風がココナッツのプランテーションを襲った。
 - ・フィリピンの大統領追放騒ぎで、砂糖が手に入りにくくなった。
 - ・カカオの主要生産地域も中央アフリカで起こった戦争に巻き込まれた。
 - ・チョコレート工場の労働者が、給料の引き上げを求めてストライキに入った。
- ここでは、実際にこうしたことが起こるかどうか、ということが大事なのではなく、お互いが「がんじがらめ」といっていいほど深い依存関係にあることを認識してもらうことを主眼としている。

事例 3 :**赤か、緑か**

ねらい：
・負ることの悔しさを味わう。（特に、情報が足りないことによって負けてしまう場合の）
・より多くの点数を稼ぐ方法として、競争以外の方法がないのかを知る。
・ゲームと現実の世界との違いや共通点について考えてみる。

展開：

1. まず、生徒たちにゲームをすることを伝える。ゲームの目的は、できるだけ多くの点数を稼ぐこと。この点については、ゲームの間に何回となく繰り返す。
2. 同じ人数の 4 つのグループに分かれる。グループ内では、どのようにして決断してもよいことを伝える。（人数が多い場合は、8 つのグループに分かれ、4 つずつ 2 つの大きなグループに分かれてゲームをする。）
3. 全員に以下のルールを説明する。全部で 10 回やること。赤か緑かグループ内で決めて、それを紙に書いてスコアラーに届けさせること。得点は、以下のように決められていること。
全部のグループが緑の場合は、それぞれ +50。
3 つのグループが緑で、1 つが赤の場合、緑は -100



で赤は+400。

2つのグループが緑で、2つが赤の場合、緑は-200
で赤は+200。

1つのグループが緑で、3つが赤の場合、緑は-400
で赤は+100。

全部が赤の場合、それぞれ-400。

繰り返して、ゲームの目的は、できるだけ多くの得点を稼ぐことであることを伝える。

4. 一回一回、赤か緑を記入する際には、充分時間を与える。また、教師が許さないかぎりは、グループ間で話し合ってはいけない。紙がスコアラー（=教師であってもよい）に届けられると、それを読みあげ、黒板の得点表に書き込んでいく。

5. 5回目と8回目の前には、グループの代表を選ばせ、代表4人が話し合う時間をそれぞれ1分間ずつ持たせる。そしてその場合の得点を、5回目は通常の2倍に、8回目は通常の3倍にする。

6. 10回目が終わると、結果について話し合う。どのグループが勝ったか？

生徒から、ゲームをしていた際中の印象や感想を聞く。目的やルールをみんながしっかり理解していたかどうかを聞く。目的を達成するためには、どうすればよかったです？なぜ、そうしなかったのか？

現実の世界で、このゲームと同じようなこと正在いる状況があるかどうか考えてみる。

出典：共に、BAGEP LESSON PLAN, World Affairs Council of Northern California, San Francisco

○教案の解説

対象： 中学生、小学生（高学年）、高校生
教科： 社会科、地理など（赤か緑かは、道徳、特活）
時間： 1時間

事例2は、身近な食べ物、衣類、道具などを通じて、自分たちと世界とのつながりを学習する国際理解教育のもっとも効果的な方法の一つとされている事例である。事例1でわかった自分たちのまちと世界とのつながりの一つの具体的な事例として展開してもよいし、逆に事例

1の調査の前段に位置づけることも可能である。

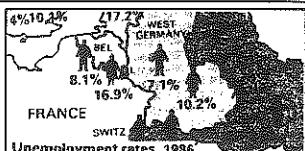
日本ではバナナや天ぷらそばなどをを使った授業がよく知られているが、本教案は、子供たちに極めて身近なチョコレートを材料にしてその背景にいろいろな国や人々の存在があることを学習させながら、そこに象徴される世界の相互依存性に気づかせている。また、たとえば小学生を対象にすれば、鉛筆やハンバーガーやおせち料理などの中に原材料生産国としてどんな国が見えてくるかを考え、世界地図でそれらの国の位置を調べる、そして関係する国々のちらばり／かたよりを意識するという形で展開できる。あるいは中学生であれば、それぞれの国を詳しく学習して、それらの原材料がその国の経済にどのような影響を与えているのか、その国と日本、あるいは、自分たちのまちとどのようなつながりがあるのかを探ることができる。さらに高校生レベルでは、多国籍企業や世界の経済構造（先進国と途上国の経済的な支配・従属関係など）というテーマにまで発展させて学習することが可能であろう。

事例3には、各グループの判断と行動が相互に関連を持ち全体に影響することを、ゲームを通して体験するというおもしろさがある。学習の焦点は、ゲームそのものと後半の話し合いにある。勝敗を決定するしくみについて考察し理解させた上で、現実の社会のしくみに关心を向かせ、現代社会の抱えている問題や不合理性に気づかせることができる。

○テキストの解説

事例3と4は、北カリフォルニア国際協議会内に事務局をおくサンフランシスコ湾岸グローバル教育プロジェクトの主要な事業の一つであるレッスンバンクに収められている授業案の1例である。このレッスンバンクには約500の授業案がある。

レッスンバンクは、教師用の展開例と生徒用のハンドアウト等、1回の授業で必要な資料をまとめた授業案を、テーマや国・地域別に保管するもので、ERICもこれを活動の中心的柱の一つに据えている。先生方が、それらを実践することを通して、それらの修正・改良案が新たに授業案としてバンクに蓄積されていく仕組みになっている。



事例 4 :

世界の労働者たち

- ねらい：・地球的レベルで労働のあり方を理解する。
 ・労働者の移動が、各国の経済および国際経済にどのような影響を与えていたかを考察する。
 ・第三世界における、地方から都市への労働者の移動が引き起こしている影響を調べる。
 ・地図から、どのような要因が労働者の移動に関係しているかを考察し、政治、経済、社会の条件と労働のありかたとの関係を見出す。

対象：高校生

教科：政治・経済、現代社会、地理など

時間：2～3時間

準備するもの：プリントと世界地図（生徒の人数分）

展開：

- 1 導入として次のようなことを学級全体で話し合う。
 ・あなたにとって、「労働」とは何ですか、「労働」

の定義は何ですか。

- 「労働」は、人々の生活にどんな役割を果たしていますか。
- 「労働」は、主にどんな分野にわけられますか。
- 近年、労働形態においてどのような主だった変化が見られますか。（例：工業から情報産業への移行）
- 世界中の労働者が共通して抱えている問題の例をあげなさい。（インフレ、安全面の問題等）

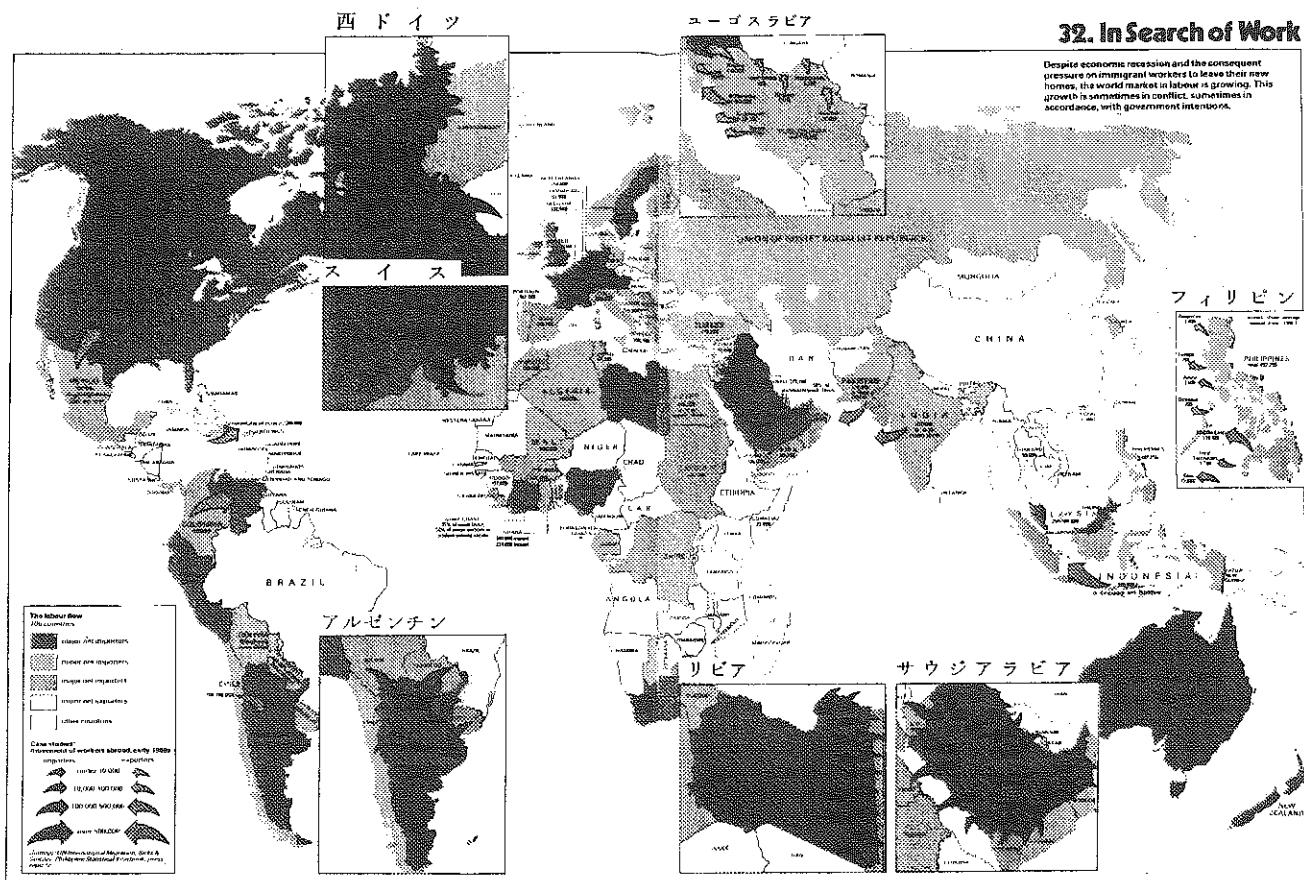
- 2 世界地図とプリントを配る。個人ないしグループでプリントを完成する。

全員で回答について話し合う。

- 3 地図を参照して、諸地域や国レベルの将来的な失業率を推測する。推測した数字からどのような影響を地球社会はうけると考えられるか。例えば、失業者のための社会福祉がますます必要になってくるのではないか。

応用：

- 1 農業従事者や工場労働者などの職業を一つ選んで、諸外国と自分たちの国とでその職種を比較、対照させる。特に注目する点としては、社会的地位、労働条件、給与、必要な訓練や教育、その職業の中でみられる変





化（例：小規模な家族農業から大規模農業経営へ）などである。

- 2 ゲストスピーカーを招いて、ある国の労働、仕事観、あるいは失業問題といったことについて話をしてもらう。もちろん、当該国の人の方が望ましいが、その国で生活したことのある日本人でもいい。生徒に質問させて、異文化間の比較をさせる。
- 3 外国人労働者をテーマにディベートさせる。（その方法論については、教案の解説を参照）

プリント

- 1 地図を参考にして、「労働者の移動」の最も大きな影響を受けている地域を書き出しなさい。
- 2 なぜ人々は職を求めて自国を離れるのか、その原因を書き出しなさい。
 - ・政治的原因（例：労働組合に属していて、解雇されたなど。）
 - ・経済的原因（例：働く場の不足など）
 - ・社会的原因（例：宗教上の差別など）
- 3 自国を離れた労働者が受入れ国にどんな影響を与えているか、その例をあげ、簡単に説明しなさい。（2と同じく、政治面、経済面、社会面）
- 4 自国を離れた労働者が本国や家族にどんな影響を与えているか、その例を書き、簡単に説明しなさい。（3と同じく、政治面、経済面、社会面）
- 5 自国を離れた労働者にとって、その移動はどんな意味を持っているか。
- 6 第三世界で起こっている代表的な現象の1つは、膨大な数の人々が地方から都市へと移動していることである。このような移動が起こる原因をいくつか書き出しなさい。また、こうした移動が第三世界諸国にどんな影響を及ぼしているかを説明しなさい。

出典：ACTIVITIES USING THE NEW STATE OF THE WORLD ATLAS, Center for Teaching International Relations, Denver, 1988

○教案の解説

本教案の特徴は、特定のテーマに関連した異なる統計を表わした世界地図を複数利用することにより、問題の背景や条件を多角的にしかも地球規模で考察できる点にある。また複数の情報（統計）を自分で分析し、結論を引き出すことができる技能の学習という面でも、今後の情報化社会に対応する教育という意味で、注目すべきアプローチといえよう。（本来この教案でも、移動する労働者その他に、国民総生産、労働力に占める農業従事者の割合、女性の労働者、組合の組織率等を表わした世界地図が使われている。）

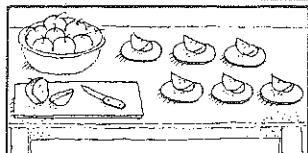
応用の3では、教室を日本政府ないし地方自治体、中小企業の経営者、外国人労働者、民間ボランティア団体などの役に分けて、ディベートやロールプレーをさせてみるとよい。その際、各自の役について十分理解できるように、必要な資料を与えたり、事前に各自で調べさせる事が重要である。それによって、ある条件の下におかれた人の行動を他人に教えてもらって演じるのではなく、自分の頭で考え主体的に判断して演ずるという作業が可能になる。

○テキストの解説

『新世界情勢地図を使った活動事例集』から紹介した。教案の開発、編集、出版ともコロラド州のデンバー大学を母体とする国際関係教育研究所（C T I R）である。C T I Rは、1968年に設立されて以来、グローバル教育関連の教材開発と出版を行うと同時に、大学や大学院では教師のトレーニングをはじめとした単位の取得が可能なコースも設けるなど、新教員の養成やベテラン教師の再教育にも大きな役割を果たしている。

この事例集には不可欠な『新世界情勢地図』は、もともとイギリスで1984年に出版されたものである。60近いテーマが収録されており、それらを極めてわかりやすく地図の形に表現している。すでに紹介した労働力に関する地図の他に、軍事支出、エネルギーの生産と消費、食糧の生産と消費、金融、貿易、宗教、識字率、女性の権利などのテーマの地図もある。

この『新世界情勢地図』の著者が冒頭で言っているように、情報が有り余る社会でありながら、有効な情報・資料は意外なほど少ないので実情である。

**事例 5****世界はどんなふうに食べているか**

- ねらい：
 • 十分な資源の存在する世界において飢えが広く存在していることを認識し、飢えの原因が単なる食糧の不足のためではないことを理解させる。
 • 飢えの原因についてもっと疑問をいただくようになる。
 3. 資源の分配の不平等に気づく。

対象： 小学生（高学年）、中学生

教科： 栄養、社会科、地理など

準備するもの：世界地図、栄養のあるおやつを一人一人に十分いきわたるだけの量用意する。例えば全粒粉のクラッカー、果物、ピーナッツ、ポップコーン、レーズンなど。

展開： 注：この活動では教師の側の感性が重要です。

1. 前もっておやつを用意し、世界の資源分配に合わせた分量に分ける。

例えば24人のクラスでは、198枚のクラッカーを用意する。

- ◎ 6人(25%)には何も当たらないか、こぼれたかけら。
- ◎ 6人(25%)には2枚ずつ。
- ◎ 6人(25%)には6枚ずつ
- ◎ 5人(22%)には20枚ずつ
- ◎ 1人(3%)に50枚

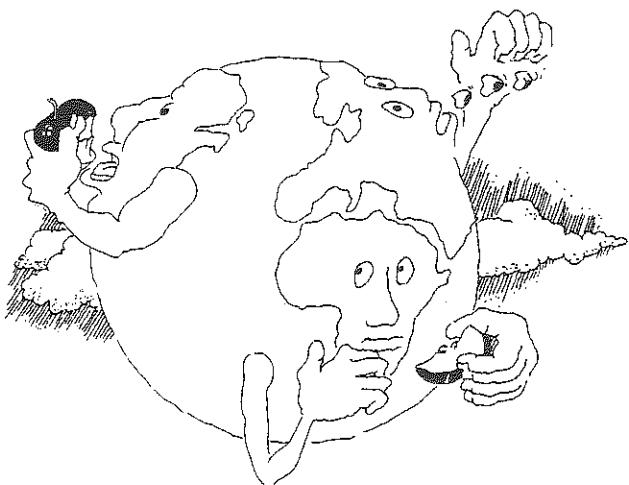
2. 子供たちに、世界の人々が得ているだけの量に似せておやつを配ることを説明し、世界の食糧分配について子供たちに議論させる。どれぐらいの人々が飢えており、どこに住んでいるかなど。個人やあるグループが、どこかの国のことであるかのようには考えさせないように。おやつの分配は世界の食糧分配の在り方を反映はしているけれど、すべての国の中に、飢えている人や十分に食べれている人がいることを強調することが大切である。

3. 食べていいというまでは手をつけさせないようにしながら、おやつをランダムに配る。たくさん受け取る子供の隣は何もないという具合になるように。

4. このおやつの分配が、現実の世界の食糧分配の状況を反映していることを説明する。例えば、アメリカのような国々ではほんの一握りの金持ちがいて、多くの中位の収入層があり、飢えることのある貧困層の人々も少しいる。またスウェーデンのような国々では、ほとんど総ての人々が中流の収入で、飢える人はいない。インドのような国々では、多くの人々が貧困で飢えているが、金持ちも、中流階級も少しいる。中華人民共和国のような国では、ほとんどの人々の収入が中から低所得ではあるが、飢える人はいない。

この状況に対し、子供たちからの反応を引き出す。クラスで、分配をもっと公正なものにしたいか、それともこのままで食べてしまうか考えさせる。分配を変えるとしたら、彼らなりのやり方で公正な方法を考えさせる。これはかなり難しい課題である。ここでの目的は世界の人々にとって問題の公正な解決に向けての調節がいかに難しいかについての感じをつかむところにある。

5. おやつを食べる。世界には、すべての人に行き渡るだけの食糧があることを説明する。実際に食べてみてそれぞれどう感じたか、現実の世界で食糧が平等にいきわたるようできるか（展開2で議論した食糧分配の在り方と比較しながら）話し合おう。





○教案の解説

この教案は、「持つものと持たざるもの」の不平等を体験させることにより、問題の意味を実感を伴って理解させる手法として知られている。しかもこのシミュレーションの素晴らしさは、不平等の事実に気づかせるだけでなく、「なぜ?」「どうしたら公平に分配できるの?」のいう問題意識に発展させるところにある。

おやつを分配する時に、誰がどれだけもらうかは、くじを用意して決め、「持つもの」と「持たざるもの」のどちらに属するかはまったく運次第であり、何の根拠もないことを説明してもよい。

○テキストの解説

本テキストを開発、出版した食糧・開発政策研究所（別称フード・ファースト）は、世界的な飢餓の原因の調査研究とその結果の普及を中心に活動している非営利団体である。この『フード・ファースト・カリキュラム』は、1977年に出版された『フード・ファースト』（日本語訳は『食糧第一』三一書房、1982年）をフォローする形で1984年に出版された。このミリオンセラー『フード・ファースト』を読んだ読者、特に先生方から、「問題はわかった、でも学校でどう教えたらしいのか?」という質問が殺到したことが教師用のテキストをつくるきっかけになっている。食糧という唯一のテーマを扱いながらも、（食糧を通して見えてくる）世界のしくみ、問題、そして解決に向けての対策をわかりやすく、しかも楽しく提示している。

「なぜ世界の人々はいろいろなことを違った方法でするんだろう?」という単元で始まり、「朝食を食べることもグローバルな活動」や「お百姓さんはどんな格好をしているのか?」「自分たちが食べている食糧がどこからくるのか?」といった授業を経て、「なぜ人々は飢えるのか」（事例5はこの単元に含まれている）を学習した上で、「“変わる”とはどういうことか?」や「食糧を与えることが解決につながるのか?」「より住みやすい世界のためのプラン」など一人ひとりのアクションに結びつくような授業で構成される「私たちにできること」という単元で終わっている。

本テキストの著者は、子供たちは楽しんで活動する時に、一番多くの事を学習し得るという点を重視しながら、子供たちが自主的に考え、問題の解決に参加できるための知識、態度、技能を学習させるように創意工夫している。しかも、実践できる教科・領域も、社会科、国語、理科、算数から音楽、美術、家庭科（日本の場合なら、さらに道徳や特活）など幅広い。

（なお、ERICは現在このテキストを翻訳中です。翻訳を使って授業で試してみたい、あるいは原本を入手されたい方は、ERICへお問い合わせください。）

ボストン子供博物館

東海岸の代表都市ボストンにユニークな子供博物館がある。乳幼児から十代半ばの子供たちが、からだと五感をフルに使える遊びと学びの空間。科学、異文化、生物、音楽、デザイン…を通して子供たちの好奇心を刺激しながら、体験を通して自ら発見、学習する機会をつくっている。従来の「見る」博物館とは大違い。子供たちの世話をあたっているのも、いわゆる監視員ではなく、大学生を中心とした実習生たちで、遊びと学びのファシリテーター役をしている。

多彩なプログラムから特に注目したいのは、国内外の異文化を体験できる展示や催し物、周辺地域の小・中学校と協力して進める異文化教育の学習教材開発、教師のトレーニングコースの実施等の異文化プログラムである。また、館内の表示には、複数の外国語を使うなどの配慮もされている。

展示や催し物の例としては、異なる文化や生活ばかりでなく、少数民族問題にも焦点を当てているアメリカン・インディアンのコーナーがあげられる。常設の日本家屋のコーナーでは、日本式浴室や仏壇などについて質問したり、たんすから学生服や浴衣を出して着てみたり、蒲団に寝ころがったり、冷蔵庫の中に冷凍ピザを見つけて「あれ、一緒」と意外そうな声を上げたりする子供たちの姿がみられる。また、ボストンに住むベトナム移民の家庭を、二階建て家屋を特設して、そこでベトナムの遊びなどに参加させながら紹介するような企画もある。

**事例 6 :****引き寄せられやすい缶は魅力的！？**

ねらい：・缶が原料によって3つに分類されることに気づく。

- ・缶の原料となる金属の性質を理解し、識別できるようになる。
- ・リサイクルするために、買う時に消費者として留意すべきことに気づく。

対象： 小学生（高学年）

教科： 理科など

準備するもの：磁石、アルミニウム・スチール・バイメタル（鉄とアルミを使った）の缶の見本

展開：

- 1 リサイクルによってどれだけの資源が節約できるかを話し合わせる。「リサイクル」の意味を確認する。
- 2 缶がリサイクル可能であること、缶の中には種類によってリサイクルしやすいものとしにくいものがあることを説明する。特に主要な3つの例をとりあげる。
 - ・アルミニウム（例：炭酸飲料の缶など）
 - ・スチール：すでに薄くコーティングされているが99%は鋼鉄（スチール）（例：トマトジュースの缶）
 - ・バイメタル：ふたがアルミニウム、胴体と底が鋼鉄。（例：ジュースの缶など）
- 3 次の様な方法で金属の種類を識別できることを説明し、実験・観察させる。

1) 磁石を出して見せる。「これまでに磁石を使ったことのある人？」数人の生徒を選んで、磁石がどんなものを引寄せるか、これまでに気づいたことなどを発表させる。磁石は、鉄か鋼でできいて、鉄や鋼を引きつけることを説明する。磁石が、スチールとバイメタルの缶は引きつけるが、アルミ缶は引きつけないことを実際にやってみせる。

2) 外見上の特徴
三種類の見本の缶を順番に回して、それぞれの特徴

や違っている点など気づいたことを発表させる。（例：重さ、合わせ目、色、光沢など）バイメタル缶は、アルミ缶と外見がよく似ていて、見分けがつきにくいくことに気づかせる。三種類の缶の特徴をまとめた図表を参照して、実際に缶を使って比較させる。

応用

- 1 学級で缶のリサイクリル・センターを始める。学校に持ってくる前に、洗って平たくしておく。
- 2 リサイクルのためにどのような缶を用意したらいいかを、マンガを描かせたり文章で説明させたりする。
- 3 アルミニウムの原料ボーキサイトはどこで採掘されているか、地図で勉強する。
- 4 リサイクルによって、削減できる鉄・鋼・アルミニウムの生産量を話し合う。（たとえば、アルミ缶からアルミニウム金属を再生するのにかかるエネルギーは、ボーキサイトからアルミニウムを精練するエネルギーの3%あれば足りる。また、350mlのアルミ缶一缶を造るのに必要な電力は、40Wの伝統を8時間点灯させる電力に匹敵する。）

※評価のための授業前後の質問

- ・アルミ缶とバイメタル缶とを見分ける方法を三つあげなさい。

3つの缶の表

アルミニウム	バイメタル	スチール
* 1. 磁石に引き寄せられない	* 1. 磁石に引き寄せられる	* 1. 磁石に引き寄せられる
* 2. 多くの缶は、「アルミニウム製」と表示がある	* 2. 底にへり、縁がある	2. 常に縫合目がある
* 3. 縫合目がない	3. 注意して見ると底がきれいに磨かれていない	3. アルミニウムより重い
* 4. もし缶の底が丸くて光沢があればアルミニウムである	4. 縫合目はあるかもしないし、無いかもしない	
5. 光沢がある、銀色、なめらか		
6. 軽い		
7. 注意して見ると底がきれいに磨かれてている。		

(=確かな見分け方)



事例7：

私、袋は要りません！

- ねらい：・買物した商品を店から家庭に運ぶのに適当な入れ物をつくる。
・何度も繰り返し使用できる自分の買物袋を使えば、一年にどれだけのエネルギーを節約することができるかを計算する。

教科：美術、数学、家庭科など

対象：小学生（中～高学年）、中学生

展開：

- 1 買物した商品を店から家庭に運ぶのに、どうして再使用できる袋を使った方がいいのかを話し合う。
- 2 各家庭で1年間におよそ何枚の買物袋（ビニール袋、紙袋）を使っているか計算する。もし自分の袋を持って買物に出かければ、1年におよそどれだけのエネルギーを節約することができるか計算する。（米国では、紙袋を作るのに約11、315cal/g・ビニール袋は約10、281cal/g必要）
- 3 家庭科や美術の授業で、買物袋のデザインや飾りについていろいろな可能性を話し合い、可能なら実際つくってみる。
- 4 ビニール袋と紙袋を比較して、良い点と悪い点を話し合う。

※評価のための授業前後の質問

- ・あなたの家庭では、1週間に何枚の買物袋（ビニール袋、紙袋）を使いますか。
- ・何通りの仕方で、買物袋をリサイクルあるいは再使用できますか。
- ・どんなものが、紙やビニール袋のかわりに使えるか書き出しなさい。

出典：A-WAY WITH WASTE: A Waste Management Curriculum for Schools, Washington State Department of Ecology, 1985

○教案の解説（あき缶／買物袋）

この二つの教案は、包装を取り上げてゴミ、資源、エネルギー、リサイクルについて問題に気づかせたり理解を深めたりした後、自分たちがこの問題にどのように関わっているのか、あるいはこの問題の解決に向けてどのように参加することができるのかという態度や技能の学習も含まれている。学年に応じて、諸テーマの理解の深め方を調整すれば、小学生低学年から中学生・高校生まで応用できる。

なお、あき缶の事例についてだが、日本においてはバイメタルの缶もすべてスチール缶として扱われており、従って、アルミ缶とスチール缶の普及率は約2対8である。また、アルミ缶の場合はその4分の1が缶としてリサイクルされているのに対し、スチール缶はくず鋼などになっている。さらに、アルミ缶は資源回収業者が一缶1～2円ぐらいで引き取ってくれるが、スチール缶の場合は難しい。詳しくは、あき缶処理対策協会（tel:03-211-2072、東京都千代田区丸の内1-8-3-745）およびアルミ缶リサイクル協会（tel:03-582-9755、東京都港区赤坂2-13-13）。後者からは、磁石も手に入る！

○テキストの解説

本教案がおさめられている『ゴミをなくす』は、ワシントン州が1983～84年に開発したテキストで、幼稚園から高校生までを対象としている。ゴミ問題が深刻化する一方で、もはやお金とエネルギーを処理に注ぎ込むだけではすまないと認識した州が、より抜本的な改善を図るため、学校教育のカリキュラムにこのテーマを導入しようとしたのである。

一人一人の行動が、ゴミ問題を解決するための第一歩であることを強調し、それぞれの立場で（教師、児童・生徒、親、あるいは年齢層に合わせて）何ができるのかを具体的な方法で示している。リサイクル（再利用、再生）の概念を柱にして、理科、数学、社会科、外国語、家庭科、美術、商業など幅広い教科の中で扱うことができるよう工夫されているのも特徴である。テーマとしては、堆肥、消費者意識、エネルギー、ゴミの埋立処理、あき缶・あきビン、リサイクル、資源保全、ゴミの削減などを扱い、全部で75の活動をおさめている。



情報コーナー

○ お知らせします

>『ひと』の特集・ゴミの授業をつくる

日本でも、去年あたりから環境問題がマスコミ等でもクローズアップされ、授業で環境問題を扱う先生が増えています。太郎次郎社の雑誌『ひと』でも、今年に入ってから3月号と7月号で2回もゴミの特集を組んでいます。中には、事例6の応用として使えるロールプレイ（消費者代表、スーパーの店長、飲料会社の社長、政府の役人、市の清掃局の担当者）も含まれています。

連絡先。〒113東京都文京区5-32-7

tel: 03-815-0605

○ 一緒にやりませんか

>普及員および編集員募集

このニュースレターを口コミや手渡しや郵送で普及してくださる方を募集中です。（何部くらい必要かお知らせください。）

また、ニュースレターの編集メンバーとして、より多くの情報を接したいという方も募集中です。

発信・ERICニュースレター編集委員会

○ 情報さがします

>情報発信者募集

東京の北区の片隅にあるERICが、関東の、ましてや全国の情報を網羅することは到底不可能です。皆さんの地域の動きを発信してくださる方募集中です。（下の藤原先生の提案に応えるためにも是非よろしくお願ひします。）

発信・ERICニュースレター編集委員会

○ 私はこう思うのですが...

>国内、特に地方の情報を大事に

少なくとも2ページ分は地方の情報を入れるべきです。また、欧米の紹介と同時に日本での実践例も紹介すべきです。

発信・藤原孝章（私立報徳学園高校）

tel:0797-73-5318

>日本の国際化に不可欠な国際理解教育

今後の日本に望まれる国際化のための最も大切な仕事は、まさに国際理解教育であ

ると思っておりましたので、ERICの活動には両手をあげて応援のエールを送ります。

ちなみに、私の地域にも今年度より国際課コースを開設した羽黒高校があります。

発信・山口吉彦（アマゾン資料館）

〒997山形県鶴岡市陽光町17-11

tel: 0235-22-7969

○ 海外情報

>『数学とグローバル教育』

あの中学校や高校で教えられるまったくおもしろくない数学の授業を覚えていますか。この事例集は、数学をおもしろい授業にするだけでなく、数学にもグローバル教育を導入できることを示しています。比率、円グラフ、棒グラフ、統計、確率、微分・・などを使って、人口の増加率、食糧と飢餓、資源の不足、廃棄物、軍事競争など様々な国際問題を学習します。

Richard Schwartz, Needham, MA (Ginn Press) 1989

>『音楽の中での異文化理解教育』

東南アジア、インド、西アジア、ヨーロッパ、アメリカ（一言でアメリカといっても、ヨーロッパ系、アフリカ系、アメリカ原住民などに分れる）を含む、世界の音楽の伝統を音楽の授業に導入しています。対象は、小学生から高校生まで。100以上のイラスト、図、曲例のほか、解説つきの参考資料集や音楽以外の教科で異文化音楽を導入するアイディアなどがおさめられています。

Music Educators National Conference, Reston, VA 1989.

>『世界を住みよくするために：グローバル教育のための創造的活動事例集』

地球社会の相互依存性と国際的な開発問

題について学べる創造的な活動事例をまとめたハンドブックです。マンガ、パントマイム、ダンス、写真、指人形、物語、料理、映画などをを使った数多くのユニークな手法を紹介しています。

Office on Global Education, NCC, Baltimore 1989

>『家族を通して日本の文化を学ぶ』

この小・中学校の教員によって書かれた教材は、ある一つの家族を通して日本の家庭生活や文化を紹介しています。授業では、33の事例を通して、そこに描き出される生活や価値観を学習できるようになっています。

Social Science Education Consortium, 855 Broadway, Boulder, CO 80302

>『州の枠を越えて：州政府と国際理解教育』

3ページで紹介した調査報告を中心に、1989年4月に全米知事会の主催で開かれた州レベルの国際理解教育への取り組みに関する会議の報告書です。

National Governors' Association, 444 North Capitol Street, Washington, DC

○ 今、ERICでは...

ニュースレター第1号の発送作業が終ったのは6月18日。第2号は、学校が夏休みに入る前に皆さんの手元に届いた方がいいのでは思い、原稿〆切は6月22日。従って、この間わずか5日間。

ニュースレター（第1号および第2号）への反応・フィードバックまだの方、お待ちしています。

なお、第3号の発行は9月末を予定しています。情報コーナーの各項目（「こんなことしてます」を含めて）に当てはまる情報、ドシドシお送りください。

ERIC International ERIC NEWSLETTER No.2 July 1990

国際理解教育・資料情報センター

〒114 東京都北区田端1-21-18 津田ビル1F 電話=03-5685-1177

このNewsletterの印刷・編集費用の一部は庭野平和財団からの後援です。

リサイクルを考え、印刷用紙に再生紙を使用しています。